
青天の軌跡

睦月健人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青天の軌跡

【Zコード】

Z9027V

【作者名】

睦月健人

【あらすじ】

オペレーション・サンダー・ブレイクより数ヶ月前。オーガ小隊に課せられた任務『山岳騎馬民族を殲滅せよ』。そこでジニスキーは伝説と言われる『青麒麟』に出会い、過去の出来事を思い出す。

はじめに

この小説は作者の妄想から出来上がりました、サッカーをしないイナズマイレブンの一次創作です。また、以下の注意点を含みます。

- ・ジニスキーをメインに据えてみた。
- ・オーガしか出ない。本当に。
- ・サッカーはしない。とことんしない。
- ・前線の話。時軸的にはオペレーション・サンダーブレイク発動より数ヶ月前。
- 経験を積むために駆り出される話。
- ・バトルあり。主に銃撃戦。
- ・敵は山岳騎馬民族。大陸の方から渡ってきたようだ。
- ・騎獣という動物登場。
- ・オーガ無双。
- ・流血、怪我、暴力表現あり。
- ・オリジナルキャラは出ない。モブのみ作りました。
- ・オーガ無双というかジニスキーが出張るというか。
- ・ジニスキーの出自捏造。

注意点に関して「全然構わないぜ！」という照美様は先にお進みください。

誰得俺得小説ですが楽しんでいただけると光栄です。

- - - - -
用語説明

ホウニーアオ

今回、オーガ小隊が殲滅すべき敵。

五十年ほど前に大陸から渡ってきた騎馬民族が山岳地帯に住み着いたもの。

近年近隣の街との領土問題が悪化。

反乱を企てる違反分子になってしまった。

ホウニーアオとは中国語で『渡り鳥』の意。

騎獸

主に山岳地帯とその近辺に生息する。

その種類は多岐に渡るもの、太古の昔から存在する希少な動物。馬を素体とし、更に別の動物の特徴を併せ持つ。獰猛な気性で、肉食。

今回の殲滅任務の場所である山には超稀少騎獸『青麒麟』が生息。騎獸保護地になっている。

青麒麟

その名の通り、青白く輝く体毛を持つ騎獸。人に馴れることは滅多なく、過去には人に襲いかかり食い殺すことさえあつたと言われる。

非常に足が強く、早いため、ほぼ一日中走ることが可能。跳躍力も高く、山岳地帯に好んで生息するのも頷ける。

雌をリーダーに、その子供達で構成される群れで活動する。雄は基

本的に一頭で行動する。

上顎から伸びた長い歯は縄張り争いのほか、捕食や巣穴の掘削、マーキングに用いられる。

また、美しく見事な歯並びの密猟も多い。

1 ホウニイアオ

険しい山脈が連なる山岳地帯。

カツカツと軽やかな蹄の音が響いていた。

山岳地帯用に配備されている軍馬での行軍である。

「多分この先はもつと狭く険しくなつてゐるはず。あまり急ぐと滑落する可能性もある」

「詳しいな、ジニスキー」

「この辺りは庭みたいなものだ」

「青麒麟は大丈夫か?」

先導しているジニスキーが軽く騎獣の首を叩いた。青白く輝く体毛が特徴の騎獣、青麒麟。

長い牙を有する口から咆哮がほとばしる。

「……大丈夫そうだな」

バダップが、その美しい銀髪を山岳地帯特有の風になびかせ、声を張り上げた。

「この一帯は我らではなく敵に分がある。注意して進行するぞ!」

「はっ!」

「隊長、この馬の飾りはどうにかなるもんぢやないんですかね。あ

とこの格好も」

サンダユウがうそばりしたようにうつり言つて手綱を握り直す。

確かに、カモフラージュのためとはいえ、馬をギラギラに飾りたて、ゴテゴテの刺繡が施された服を着ての行軍である。

「ジニスキー」

その辺りはどうなんだ、と。

バダップが赤い瞳をジニスキーの背中に向ける。

「撃たれたければ外していい。こうやって飾りをつけたり、服を着ていれば味方と思われて撃たれない。危険を減らすには仕方がない」

青麒麟が唸り、歩を止める。

「どうした」

「見て来ます。イエーガーは「」に。皆を任せむ」

イエーガーと呼ばれた騎獣が一つ額を、山唯一の道にどつかりと座り込んだ。

「コルルルル……」

「やっぱ、軍部に配属された騎獣世話係の息子は違うな」
エスカバがライフルを背負い直し、後ろにいるミストレに同意を求めた。

「どんな道にもプロフェッショナルがいるってことだね。山岳民族特有の文化つて、飾りも綺麗だし、刺繡も美しい。三十年前はいい関係だったと聞いたよ。敵じゃなかつたら今も彼らと良好な関係を築けたはずなのにね」

「この任務が終わつたらこの服やるよ、ミストレ」

「レア物になるかもしないしね。汚れないといいな」

ミストレが呟いたのを最後に、辺りは静かになつた。イエーガーが小さく、ため息を吐くように喉の奥で鳴いた。

それから三分ほど経つて、ジニスキーライフルを右手、数羽の雷鳥の首を左手に握つて戻つてきた。

「敵じやなかつた。反乱分子じやない平和的解決希望者が数人いただけ。危ないから逃がしてきて、ついでにイエーガーと俺らのメシ」

「やつた、久々の肉」

「匂じやないから脂少ないのでな」

ジニスキーライフルを取り出し、雷鳥をまとめて縛つて鞍の後ろに積む。

「じゃあもう少し進むと洞窟があるから今日は其処で休もう。明日は夜も進んで、明後日には本格的に戦わなきやならないな」
イエーガーに跨がつて、ジニスキーライフルを進み始めるのを見て、バダツブ達が続く。

日は、もうすぐ暮れようとしていた。

洞窟。

そんなに広くはないが、全員が入って食事と休息を取るぐらいならば問題無さそうだ。

雷鳥ついでにジニースキーが取ってきた薪で火を起こし、明かりにしながら雷鳥の羽を筆つていく。

「じゃあ水と薪取つてくる。イエーガー」

「グォン」

ひらりとイエーガーの背に跨がって、崖を降りていぐジニースキー。それを横目で見送ったバダップが口を開く。

「ジニースキーには、家族が亡いそうだ」

「それって、天涯孤独つてこと?」

「いつか母親のようになるのだと、語っていた。騎獣と共に生き、騎獣と共に死ぬ。そんな生き方を望むと」

「寂しい話だね」

ミストレがぼそりと囁くように呟いて、ため息を吐いた。息が当たつて、焚き火が微かに揺れた。

騎獣『青麒麟』の蹄の裏には収納可能の無数の鉤かぎが付いている。崖を駆け上つたり、駆け下りたりする際、滑落を防止するためである。

イエーガーの角に掴まり、鞍にしつかり尻を着けて座る。

「よし」

ポンと首を叩くと勢い良く駆け下り始めた。土煙がもつもつと上がり、小石が舞う。

イエーガーは軍の騎獣ではない。

先日ジニースキーが乗っていた軍馬が足を滑らせて滑落してしまい、その時彼を助けたのがこの一帯に住む青麒麟の小さな群れのリーダ

ーであるイエーガーだった。

イエーガーは鞍を着けることも、人間も拒まないという騎獣らしからぬ性質を持つていた。

遠吠えで群れの仲間に知らせた後、馬が着けていた鞍を着けて、ジニスキーを背に乗せて小隊のいる地点まで戻つてくれたのだ。てっきり夜が明けたらいなくなつているものと思っていたのだが、こうして今も一緒にいる。

「薪はどこ辺のがいいかな」

下まで降りたイエーガーがどんどん進んでいく。

牙で器用に枝を折り取つてはジニスキーに渡して、束ねさせる。五分ほど続けた結果二十束ほどが作れたので、ジニスキーが止めるよう言うとイエーガーは頭を一つ振つて木くずを払つた。

「水汲んで戻ろうか」

「オオン」

イエーガーが奥に向かつて走り始めた。

群れのリーダーになる青麒麟は大抵年老いて子供を多く産んだ雌で、かなりの頭脳を持ち、人語を解すことさえあるといわれるが逆に体力は衰える。

イエーガーにはそれがなく、リーダーにしてはかなり若い個体だと言える。

それでも引き締まつた筋肉と高い頭脳、長く美しい牙を持つイエーガーは威厳あるリーダーとして十分にやつているのだろう。「ここか?」

「オン」

大きな泉。

澄んだ水を大量に湛える泉。

月が照らすそこはとても美しい。

「よし、汲むか」

ジニスキーが水汲み用の容器に水を汲む横で、イエーガーがたらふく水を飲んでいる。馬や牛と同じで、水を大量に飲み、餌を食べさ

えすれば騎獣はよく働く。

ただ、水も餌も満足に「えられないにも関わらずイエーガーはよく働く。

やはり過酷な環境で育つた騎獣はぬぐぬぐ育てられる軍の騎獣よりも桁違いに頑強である。

「たつぶり飲んだか?」

「オオオン」

「まだか」

「オオオン」

「違う?……ああ、これだな」

腰に着けているポーチから岩塩の塊を取り出し、差し出せばくわえて噛み砕き始める。

一応母の教えで、騎獣の世話の仕方は暗記している。

騎獣は岩塩が大好物なのである。

水を大量に飲んだ後は特に、体内の体液濃度や浸透圧を調えるために大量に塩を摂取するのだ。

「美味しかったか?」

塩を食べ終わり、口の周りを舐め回すイエーガー。野生では岩塩などわずかにしか手に入らない。それに、子供の騎獣の方が体の調子を調べるために塩を大量に必要とする。親や群れのリーダーは子供を優先するのだ。人間よりも優れているのかもしれない。

子供を見捨てることもなく、殺すこともない。

ジニースキーはイエーガーの鞍に水を満載した容器を下げ、跨がつて元来た道を走らせた。

夜中。岩塩で煮込んだ雷鳥はジニースキーの分以外綺麗に骨になつている。

ジニースキーの分はとつぐに冷めてしまっている。食べる気にもなれず、イエーガーに向けて投げるとイエーガーは見事に口でキャツチ

して丸飲みした。

仲間達が食べた骨も、ボリボリ音を立ててイエーガーが食べてしまつた。食べられた雷鳥も本望だろ？

「お前は幸せ者だな」

「え？」

「いい仲間達だ」

「……うん」

イエーガーが体を丸める。

脇腹を枕にジニスキーが横になる。

「本当、仲間がいる前では喋るなよな。びっくりしたよ、人語を喋れるなんて」

「喋れるさ。私は人間と友好的な関係を築くために生きてきた。かつての過ちをただ……た、正すために」

ちょっと噛んでしまつたイエーガーが照れ臭そうに口を歪める。

「もう寝ろ。明日も早くから進むのだろう？」

「うん。ありがとう」

毛布代わりにイエーガーは自分の尾をジニスキーにかけた。目を閉じ、睡魔に身を任せジニスキー。

「娘よ、私は人間と共に行く。戻らなかつたその時は、強く生きよ
眠りに沈む前、最後にジニスキーが聞いたのはまるで遺言のようないエーガーの咳きだつた。

朝は、まだ遠かつた。

2 リアンシ

何も変わらぬ朝が来た。

山固有の青みがかつた霧が洞窟内にも入り込み、全員の体をしつと
り濡らしていた。

まだ暗いのだが、ジニスキーがそもそも動いて体を起こしたのに気
付いたイエーガーが尾をどかして喉を鳴らした。

そつと撫でてやると気持ちよさそうに目を細める。霧によつて付いた水滴を飛ばすためにイエーガーがぶるぶると首を振つたためチリンチリンと金属の飾りが鳴つた。

一応、霧を用心して銃器や武器、濡れたら困るのは全て雑囊ざつのうに入
れてあるため心配ないが、問題は馬とイエーガーである。

朝の内はひどく冷え込むため体力を奪われる可能性が高い。
それに今日は明日の朝までの進軍である。

体力を削られてはいいなか、ジニスキーがイエーガーの耳元で呟く
ようにして聞いた。答えは実に簡潔かんぜつだった。

「皮肉にも装飾品で阻まれて濡れなかつたな」

ただ鼻の穴が濡れてしまい、グスグス言わせているためボロ布で綺麗に拭き取つてやる。

「はくしゅん!!!」

何とも情けない声がして、ブボーが起きた。バシッとゲボーの額を
叩いて起こし、ザゴメルを一人で起こしにかかる。

「ブブブブ……」

「ゲゲゲゲ……」

「なんだあ、朝っぱらから」

ドスの利いた低い声に、ザゴメルの軍馬が目を覚ましていなないた。

それにより洞窟内は徐々に騒がしくなり、ジニスキーとイエーガー
は顔を見合させてやれやれと言つたりて首を振つた。

この山には多くの騎獣が棲息している。

地を駆ける者だけではなく、天を舞う者もいる。

その二者の代表格が『青麒麟』と『飛獅子』であった。

飛獅子は神話に出てくるワシと獅子が混ざった幻獣であるグリフィン（グリフォンとも呼ばれる）に酷似している。

要するに猛獸である。

そして今日の行軍ルートには、飛獅子の巣が集中しているのだ。文字通りの危険地帯。

「何で魔の巣窟みたいなところに踏み込まなきやならないんだよ……」

「飛獅子つていつたら軍部にもいない超稀少騎獣じゃないか。いいなあ、乗りたいなあ。地をのろのろ行くより空だよ空」

不満たらたらのサンダコウと、あからさまにイエーガーへの当てこすりと取れる発言をするミストレ。

イエーガーは鼻息を荒くして、怒り狂っている。^{さわさわ}した田でミストレを睨み、ふん、と鼻を鳴らした。

「いつちょ前に機嫌悪くしてんのか」

「あ」

ジースキーが空を指差す。

そこには数頭の飛獅子が舞うように飛んでいた。どうやら、母親が子供に飛び方を教えていたらしい。

「あれ欲しいな」

「食い殺されるぞ」

「子供かわいい。子供が欲しい」

確かに飛獅子の子供はかわいらしいのだが、大きくなつたらムキムキだし大食らいだし、あまりいいことはない。

「母親に殺されるつて」

「あつ」

「何だよエスバカ」

「バカじゅねえよ。あれ」

エスカバの指差す先にキー・キー鳴き喚く飛獅子の子供が一頭。必死に崖にしがみつき、落ちないようにしている。

「飛ぶのを嫌がる子供はたくさんいるよ。いちいち気にしてたらきりがない」

「違う違う。あいつの翼、何か変じゃないか？折れ曲がってるっていつか、障害があるっていうか」

「ん~？」

ミストレがその大きな手を細めて、飛獅子の翼を見据える。なるほど、あの折れ曲がり方では飛ぶことなど出来ないだろう。ガラツと、飛獅子がすがりついていた出っ張りが崩れて、イエーガーの顔面に当たる。

まずいぞ。

そう言う代わりにイエーガーが動いた。
勢いよく走り出し、落ちそうになつた子供を首で受け止めて着地する。飛獅子はきょとんとしている。

人間はおろか、他の騎獣を見たこともなかつたのだろう。イエーガーが山道に降ろしてやると、分からなりなりに恩は感じているらしくパタパタと尾を振った。

「よしよし、ちょっとごめんね」

ジニースキーが飛獅子の翼を触り、確かめるように引っ張つて広げる。飛獅子は構つてもらえるのが嬉しいらしく、ジニースキーの手をくちばしで甘噛みしている。

「こりゃあ先天的な障害だな。一生飛べないで終わる感じの……イタイイタイイタイイタイ」

「ちょっと抱かせてよ」

ミストレがジニースキーとイエーガーの顔面を押しのけて、飛獅子を抱き上げる。

生後一年も経たない内に体重は80キロを超す猛獣だが、見た限りこの飛獅子は産まれて二ヶ月といったところだ。
だいたいミストレの半分程度の重さだろう。

「いいなあ、かわいいな……でもこうこう自由なやつらを囲つよつ
な糞みたいな大人にはなりたくない」

飛獅子はミストレが気に入つたらしく、三つ編みをくわえて軽く引
つ張つて遊んでいる。

グオオオオ！！

刹那に聞こえた怒りの声。

親の飛獅子が怒りに猛つて襲いかかつてきたのだ。

「キイイツ！」

怯える飛獅子をミストレが、被つていた布でくるんで強く抱き締める。

「イエーガー！！」

イエーガーの、棘が突き出した蹄が飛獅子の顔面を素早く何度も蹴りつけた。

騎獣は、人間が傷つけたり殺したりすると重罪に問われる。だが、騎獣同士ならば何も問題ない。

ガブリとイエーガーのくちばしが飛獅子の左目に食い付き、押し潰す。

「ギャオオオオ！！」

凄まじい悲鳴。

それと共に飛獅子が岩壁を転がり落ちていく。イエーガーは返り血を浴びて若干興奮しているが、大丈夫そうだ。「親を撃退しちゃつた以上、やっぱり俺らが面倒見んのか……」

ミストレの腕の中でキーキー鳴いて甘えている飛獅子を見て、イエーガーがやれやれと言つような顔をした。

「つーわけで、ごめんなイエーガー。もう一回子育て頼むな」

そうジニスキーに言われて、イエーガーはがっくりとうなだれた。

その日の夜。

エスカバが一つあくびをした。

月が高く昇つても行軍は続いていた。

さすがに1日休まずは人馬共にきついものがある。先頭を行くイエ

ーガーは余計に疲れているだろう。

ミストレは眠っている飛獅子の頭を撫でながら馬を進める。

こんな静かな行軍を引き裂いたのは、一発の銃声だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9027v/>

青天の軌跡

2011年10月5日20時37分発行